



見頃の薬用植物

ヒガンバナの赤が、秋の訪れを教えてくれる時期となりました

■ヒガンバナ（彼岸花）

Lycoris radiata

生薬名：石蒜（せきさん）

薬用部位：鱗茎（球根）

薬効：去痰、鎮痛、降圧、催吐薬



秋の彼岸の頃から赤い鮮やかな花を咲かせる。茎だけが先に伸びて花を付け、花が枯れた後に入れ替わるように葉が伸びる。花と葉を同時に見ることができないため「花は葉を思い、葉は花を思う」という意味で、朝鮮半島では「相思華」と呼ばれる。異名の数は1000以上あり、代表的な「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」は、釈迦が教えを説いた後に美しく大きな赤い花を天上から散らしたという伝説から付けられた名とされる。「狐の松明」「火焰草」「火事花」のように赤い花が炎に例えられる一方で、墓地に咲くことが多いことから「死人花」「地獄花」など禁忌の異名も多い。現在では薬用として用いられることは少なくなっているが、かつてはアメーバ赤痢、解熱などに用いられ、民間薬としては腎炎、肩こ

り、むくみなどに球根をすりおろしてガーゼに包んで患部に塗られた。

球根にはアルカロイド成分・リコリンが含まれ、毒性が非常に強い決して口に入れてはいけない。暗殺や毒殺に用いられた歴史も持つ。あぜ道や墓場で多くみられるのは、毒性を利用して、モグラや野ネズミが田畑へ侵入するのを防ぐためや、かつて土葬によって納められた遺体が動物に荒らされるのを防ぐためや、飢饉の時に水に晒して毒抜きをした鱗茎を救荒食として食べて助かったことから、それさえ食べられずに餓死した死者を悼んで植えられるようになったという説がある。昨今は、「リコリス」という名前で園芸植物として白、ピンク、黄色など美しい色合いの品種が多く出回っているが同様に毒性を持つ。



「曼珠沙華」に似た名で、「曼陀羅華（まんだらげ）：天から降る幻想的な花の意、別名チョウセンアサガオ」という初秋に花を付ける植物がある。この植物もアルカロイド成分を全草に含み、鎮痛・鎮咳薬として利用される。江戸時代の外科医・華岡青洲は、動物実験や母・妻による人体実験を繰り返し、20年の歳月をかけて曼陀羅華など数種類の薬草を配合した麻酔薬「通仙散」を開発し、乳癌の全身麻酔手術に成功した。